

2002/09/01

[HOTなエスプレッソ](#) | [ITALY WEB SITE](#) | [BACK NUMBER](#) |

HOTなエスプレッソ

田中ちひろ

京都生まれ 大阪外国語大学イタリア語科卒業、88年イタリアのシエナに留学。91年よりミラノ在住。著書「普段着のミラノ案内」(晶文社)をはじめ、新聞、雑誌、インターネットサイト等に執筆。三井住友海上ミラノオフィス勤務。

26. 映画鑑賞

日に焼けた俳優たちの笑顔がまぶしい。艶やかに着飾った女優たちはいたるところでフラッシュを浴びる。

今年もまた世界中のメディアを騒がす人々とそんな彼らを一目みたいというファンたちが世界一美しい町に戻ってきた。

第59回ヴェネチア映画祭である。

今年は短編、長編、ドキュメンタリーなどすべてをあわせると143のFILMが参加し、そのうちLEONE D'ORO (金の獅子賞)を競うのが21の

映画（コンクールには参加しないが出展される映画がそれに加えて14）、PREMIO SAN MARCO（サン・マルコ賞）を競うのが18の映画となっている。

TVでは毎日審査される映画の一コマを放映し、監督や俳優たちが映画製作秘話やエピソードを語る。

審査委員たちが全部の映画を鑑賞し終わり、入賞作品を決定するのは9月8日だが、その直後からミラノ市内でもすべての参加映画が上演される。ミラノっ子の多くが連日いい作品を見逃さないように長蛇の列を作ってその鑑賞に励む。

映画鑑賞。

アメリカの娯楽に徹したアクション物やハッピーエンドの恋物語から映画の世界に飛び込んだ多くの日本人と違って、ヨーロッパの人々、ことイタリア人にとっての映画鑑賞はただの娯楽というよりは文化活動のひとつという思い入れがある。代表的なイタリア映画を思い起こしてみると、ネオリアリズムのころの「自転車泥棒」や「LA DOLCE VITA」、イタリアが世界に誇る監督フェリーニの作品、いずれも社会風刺、社会批判、あるいは人間のはかなさと素晴らしさ、見る人に問い掛けられる疑問とリフレクション……イタリアではそういったものの素晴らしさゆえに映画は人々に評価され愛された。

最近大ヒットしたロベルト・ベニーニの「ライフイズビューティフル」もただ愉快的だけの映画ではない。

つまりイタリア人の映画鑑賞というのは文字通りただ映画を見るだけではなく、そのあとの各自が感想や批評を映画評論家さながらに語り合うこともふくまれているのである。

「よかったね」、「おもしろかった」だけでは通用しない。

あのシーンのあの台詞はこういう意味だと思うけどどう思う？あの背景には監督のああいう主張があると思う。あのシーンをこういう風に撮っていればもっとよかったのに、と話は映画の内容はも

もちろん、撮影技術、映像やカットの美しさ、音楽の効果、そして俳優の演技のよしあし、ほかの映画との比較と限りがない。したがって日本では映画館は若者だけの集まる場所だが、イタリアではいくつになっても行くべき場所のひとつなのである。

ところでその映画が上演される場所、ミラノの映画館にはいくつか素晴らしいものがある。

街中の映画館は大抵由緒ある建物の中に入っていて、できるだけ建物の美しいところは壊さずに改装されているが、天井や壁に美しいリリーフが施されていたり、階段もそれこそ映画に出てきそうな優雅な螺旋階段だったり..... 映画が上映される部屋も大理石の床、大理石の柱、美しいシャンデリアに赤じゅうたんというのも決して珍しくない。映画鑑賞がまだ一部の豊かな層にしか許されていなかった頃の名残なのか..... 確かにその美しさは映画が始まる前にまずその建物や部屋に感激することも少なくないほどである。

そしてそういう場所というのが関係あるかどうかはわからないが、観客はみんなカジュアルではあってもちょっとおしゃれに小綺麗にしている。もちろん演劇やコンサートではないので帽子にドレスなどという人はさすがにいないが、トレパン姿というのもありえない。

夜の外出ということも一役買っているにちがいない。ちなみにイタリアでは映画は一番早い上演でも夕方6時ごろから、日曜祝日でも3時からで、一番込む時間帯が夕食後の10時過ぎ開始の時間帯なのである。

そんな雰囲気や鑑賞後のディベートを楽しむためか、いくらDVD、ビデオが普及し、家でソファに横になりながら映画が見れるようになったからといって、イタリア人は映画館行きをやめたりしないようだ。事実ビデオの普及で映画館入場数が大幅に減るのではないかと心配されたが、イタリアに関しては去年一年でみると逆に増加しているという。

ところでここ数年、文化活動であるイタリアの映画鑑賞、実はちょっとしたアメリカ映画ブームである。

アメリカ映画というと先ほどすこし述べたように、うまくできすぎた（いつもハッピーエンド）中身の薄いものという定評がイタリアにはあって見ないという人がいままで結構多かった。

文化的にも価値が高くないと思われていたのだ。そして最近はそのアメリカ映画が大ヒットを重ねている。

ブームの理由はいろんなところで分析されている。

イタリア映画に対する投資が足りなくて質のいい映画が作れなくなってきたから、イタリア人が本来好んだ深みとメッセージのある映画がアメリカ映画の中にも増えたから、或いは特殊撮影などの分野はアメリカ映画はやはりずっと進んでいるから。

中には、イタリア人自身が、特に若い年齢層がアメリカ映画のような娯楽に徹したものを好むようになったのは将来に夢が持てないからだとか、

「そうでなくてもストレスの多い日常生活の中で、なにも好んで映画の中にまで問題を探しに行く必要はないじゃないか」という悲しい社会論まで飛び出す始末。新聞やTVで組まれるヴェネチア映画祭の特集にも「どうして今アメリカ映画が..」というタイトルには必ずお目にかかるからおもしろいものだ。

怒られるかもしれないが、私に言わせれば...本当のところはイタリア人だって、インテリを自称する人たちだって、ただ純粋に「スパイダーマン」なんかをずっとみてみたかった。

ただ文化活動という大前提が 単純な娯楽にプレーキをかけていた、そういうことではないだろうか？

「いや、本来僕の見るとタイプの映画じゃないんだが...」と弁解しながらスパイダーマンを見に行ってしまうイタリア人のうれしそうなお顔を見るたびになんだかおかしくなってしまうのは私だけだろうか

ITALY WEB-SITE

英語で楽しめるイタリアの注目WEBサイトの紹介

<http://www.pizza.it/eng-site/default.htm>

www.pizza.it

ピッツアのレシピ、上手に作るコツ、ピッツア職人の研修先、求人情報、ピッツエリア関連の各種サプライヤー情報など、ピッツアに関することならなんでもござれ！のサイト。

[/www.museionline.com](http://www.museionline.com)

Musei Online

イタリア全国の美術館・博物館を地域・カテゴリー別に索引し、内容、場所、入場料などの情報を得ることができるイタリア文化省後援サイト。

TOP▲

| [HOTなエスプレッソ](#) | [ITALY WEB SITE](#) | [BACK NUMBER](#) |

JAPAN-ITALY Business On-line に関するご質問・ご意見は
e-mail: jdesk@japanitaly.com まで

www.japanitaly.com

©JAPANITALY.COM S.r.l-Milano All right reserved.